

発表題目：危機に抗わないという生き方
—ペルー北海岸の環境変動にみる先史漁撈民の資源利用戦略—

所属： 国立民族学博物館 外来研究員

氏名： 荘司 一步

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表の目的は、先史アンデス古期（5000-3000BC）のペルー北海岸における漁撈民を事例として、エル＝ニーニョ現象の規模と頻度が増加するという環境変動に直面した人々が、どのような戦略のもと自らの資源利用実践を再編していったのか明らかにすることである。そして、長く危機と向き合ってきた人類史の一端から、危機対応の多様な在り方を考察する。

ペルー海岸部における古期とは、豊富な海産資源を背景に定住的で小規模な集団が形成され始める時期であり、発表者はこの時期を対象に考古学的な調査・研究を進め、アンデス文明史における公共建造物の出現と集団の変容過程の解明に取り組んできた。その結果、公共建造物を生み出した一連のプロセスには、環境変動に際した生態資源利用実践の変化が大きく関わっていたことが明らかになってきた。本発表では、この実践の変化がどのような資源利用戦略に基づくものであり、環境変動という危機に対するどのような適応の在り方によって起きてきたのか、遺跡から出土する動物遺存体の分析によって明らかにする。

はじめに、貝類の動物考古学的分析を通して、当該期の貝類利用に大きな変化が生じていたこと、その要因に生態環境の急激な変化があったことを確認する。加えて、この時期に起きた生態環境の変化が、エル＝ニーニョ現象の規模と頻度が増加するという事象であったことを論証する。エル＝ニーニョ現象とは、太平洋沿岸の海流に変化が生じ、海水温が急激に上昇する海域環境の異常である。生態系は大きくバランスを崩し、不漁などの被害がもたらされるとともに、普段は雨の降らない海岸地域に大雨が降り、洪水などの被害が引き起こされる。このように、現代社会において深刻な自然災害をもたらすとされるエル＝ニーニョ現象だが、それは古期においても同様であったのだろうか。

この点を検証するために、先述の貝類利用に加えて、魚類利用がどのように変化していたのかを、出土資料から明らかにする。その結果、貝類と魚類のいずれにおいても自然界のバイオマスを圧迫するような動物利用が行われることはなく、環境変動によって増減するバイオマスに応じて利用する動物種を変化させながら、柔軟に対応していた様子が明らかになった。とくに、河川の氾濫によって増大するラグーンにおいて、大型のサメ類を対象とした追い込み漁が集中的に行われるようになる。以上のように、当該期の漁撈民は、環境変動という危機に無理に抗うのではなく、変化するバイオマスに合わせて資源利用実践を柔軟に変化させることで対応してきた。それを可能としたのは、特定の生物種に固執しない資源利用戦略が背景にあったことがわかる。特定の資源に依存した生存戦略が取られる社会とは異なる危機対応の在り方であったといえよう。一方で、こうした環境変動への対応は、結果的に自分たちの資源利用実践を大きく変化させることとなり、協同労働などを通じて小集団の在り方も変化させることとなった。危機対応を契機に社会変化が生み出されていったことが示唆される。